

『タレンタイム』、いつまでも尽きせぬ魅力と映画の背景

山本博之 (京都大学東南アジア地域研究研究所准教授／混成アジア映画研究会)

宗教・民族の対立と他者への寛容を描き、現実的な大人の目とともに若者たちの新しい関係への希望も織り込んだ『タレンタイム～優しい歌』^{*1}が制作された2009年、宗教間対立は世界の遠くの国の出来事だと感じる人も多かったかもしれない。数年後の今日、宗教の名を語る対立や暴力は世界の最も重要な課題の1つとなり、日本に暮らす私たちも決して無関係ではいられなくなっている。この映画は、まだ見ぬ世界を先取りするとともに、それにどのように向き合うかを示そうとする試みでもあった。

しかし、このような大きなテーマだけではその魅力を十分に捉えることはできないだろう。2009年に福岡国際映画祭で紹介されて以来、筆者らのマレーシア映画文化研究会^{*2}によるものを含め、『タレンタイム』は毎年のように国内各地で上映され続けてきた。その背景には、異国情緒が漂う一方で、誰にも自分に身近だと感じさせる物語の力がある。この観点から本作の魅力をいくつか挙げてみよう。

母と子。『タレンタイム』の登場人物はよく相手に触り、触ることで相手への気持ちを伝える。マヘシュは怒らせてしまった母を敬う気持ちを示すために母の足に触ろうとし、母は足を触らせないことで大きな怒りを示す。ハフィズは母に触れることに禁欲的だ。母に甘えたい気持ちはあるに違いないが、病床の母に心配をかけさせないようにと精一杯余裕がある態度を見せ、最後にようやく母との添い寝がかなう。ほかに、カーホウの母のように物語に登場しない人を含めて、それぞれの母と子の関係に思いが巡らされる。

死の影。高校生の恋愛ドラマという表の顔にかかわらず、『タレンタイム』はどの登場人物にも死の影がはりついており、時折り挿入される音楽や朗読される詩によって繰り返し想起される。ハフィズやメルが歌うのはどれも映画を見ながら歌い出したくなるような歌だが、「I Go」はまるでヤスミン監督との死別が予見されていたかのようにも聞こえる。劇中とエンディングに使用された楽曲「オ・レ・ピヤ」（インド映画『アージャー・ナチュレー』の劇中歌）には、歌詞「見知らぬ他人に 育てられたかのよう／連れてってくれ あなたの元に／偏見にしばられた世は ほくの永遠の敵」の意味を考えずにいられなくなる。

月の光。『タレンタイム』は舞台の上でスポットライトを浴びる者を選ぶ物語だが、自分で輝くのではなく周りから照らされることで輝きを発する「月の光」（ドビュッシー）を基調とすることで、スポットライトを浴びる者だけでなく、それを照らす者たちにも光を当てている。メルは、歳が近くて諍いが

絶えない妹マワール、そして家事以外でも家を支えているメイドのメイリンによって輝かされている。ひょうきんもののメルキンは、何人ものコンテスト出場者の舞台に勝手に上がりこむ。たとえ疎ましがられても一緒に歌い踊ることで応援の気持ちを伝えるメルキンの態度は、親友への寄り添い方をカーホウに伝えることになる。

このような物語を生んだのは、世界各地の文化が混じり合っているマレーシアという舞台であり、そこで生まれ育ったヤスミン・アフマドという特異な才能である。

ヤスミン・アフマド監督

ヤスミン監督は「私が死んだらみんな私の名前は忘れてもいい、でも私が作った物語はずっと覚えてほしい」と語ったことがあるが、その希望は半分しかかなわなかった。『タレンタイム』や他の作品はヤスミン監督の名前とともに語り継がれている。

ヤスミン監督は1958年7月にマレーシアに生まれ、イギリスの大学で心理学を学び、帰国して広告代理店に勤めた。国営石油会社の祝祭日ごとのテレビCM制作を請け負って多民族や家族の融和をテーマとしたミニドラマ仕立てにしたことで知られるようになり、44歳で長編映画の制作を始め、6作目となる『タレンタイム』の公開直後の2009年7月に亡くなった。自らを監督ではなくストーリーテラーと呼んだヤスミン監督は、役者経験の浅い人を積極的に使い、それぞれの持つ物語を引き出して、その人らしさを輝かせるように映画を作った。自分の感性を信じて形式に囚われず、制作に厳しく臨んで作品の出来に自信を持つヤスミン監督の作品は、しばしば陋習にとらわれた旧弊的な支配層から激しい攻撃を受けたが、ヤスミン監督は決して批判に屈せず、彼女を母と慕う若手映画人たちに支えられ、批判をユーモアで笑い飛ばしてその作風を貫いた。

ヤスミン監督の挑戦はマレーシアの映画界に大きな変化をもたらした。マレーシアは、マレー系（56%）、中華系（24%）、インド系（7%）、先住諸族（11%）などから成る多民族社会で、移民系（中華系とインド系）に対して原住民系（マレー系と先住諸族）を優遇する政策を採っている。映画制作でも、国内映画産業の振興のため、政府が定義する「マレーシア映画」の条件を満たせば国内劇場での上映義務などの優遇が得られる。その結果、マレーシアの劇場で上映されるのは、ハリウッド映画や香港映画などの外国映画をのぞけば、マレー人の役者によるマレー語のセリフだけの作品ばかりになった。これに対して2000年頃から、国内の劇場公開を前提としな

作品を撮る若い監督たちが登場した。ヤスミン監督は、この「マレーシア新潮流」の牽引役として多民族・多宗教・多言語のマレーシア社会をスクリーンに映し出し、東京を含む数々の国際映画祭で高い評判を受け、それをマレーシアに持ち帰った。今日では「マレーシア映画」の定義から言語に関する規定が外され、多民族的な構成の作品も劇場公開の機会が増えている。それらの作品は「ヤスミン的」と呼ばれ、歴代の興行収入を塗り替える作品も生まれている。

国境や分野を越えた波及

ヤスミン作品には世界各地の映画、音楽、文学、詩などの参照という特徴がある。イスラム、中華、インド、西洋の各文化を担う人々から成り立つマレーシアでは、単一のマレーシアらしさを見つけるのは難しい。世界各地の事物を少しずつ取り入れ、ときにはそのオリジナルの意味を書き換えて、全体を織り上げて作ったのがマレーシアらしさであって、純粋さを探すのではなく参照し参照されることにオリジナリティが宿るという考えが見て取れる。

ヤスミン作品もまた他の作品によって参照されている。日本とマレーシアの共同制作による『鳩』（行定勲監督、2016年）は、『タレントタイム』を含む6編のヤスミン作品の名場面が織り込まれており、マレーシア映画人のヤスミン愛が感じられる。インドネシアでもヤスミン作品を意識した映画が作られており、ヤスミン監督の作風は国境を越えて波及しはじめている。ヤスミン作品の影響は映画以外にも及んでおり、『タレントタイム』に触発されて2011年にマレーシアで上演された舞台『Parah』には、映画の登場人物と同じ名前のメル、ハフィズ、マヘシュ、カーホウが登場している。

物語の背景となるマレーシア社会

『タレントタイム』を楽しむのにマレーシア社会に関する予備知識はほぼ不要だが、マレーシア社会について知れば物語をより深く楽しむことができる。詳細な分析はマレーシア映画文化研究会発行のブックレットをご覧くださいことにして、ここでは本作の物語の背景について簡単に説明しておきたい。作品中ではある高校を舞台にタレントタイムが行われるが、地域の他の中学・高校の生徒も参加している。ハフィズとカーホウ、そしてマヘシュは同じ高校の同級生だが、メルは学校が違うのでハフィズや先生たちと知り合いではない。ハフィズたちは高校の最終学年（高校2年）で、その後の進路を決定づける全国統一試験を控えて緊張した雰囲気がある。大学進学や就職で優遇されるマレー系と違い、中国系のカーホウの緊張は見ていて痛々しいほどだ。これに対し、メルは全国統一試験を終えて大学進学予備課程に通っており、半分大人の仲間入りをした気分になっている。

マレーシアでは信教の自由が認められているが、イスラム教には国教として特別な地位が認められている。例えば、ムスリムと非ムスリムが結婚する場合、男女を問わず、非ムスリムがイスラム教に改宗する。マレーシアでは民族・宗教の



違いは冠婚葬祭のやり方の違いを意味するため、改宗すると親が亡くなっても弔えないことにもなりかねない。「ムスリムと結婚したら向こう側に行ってしまう」と言うマヘシュの母の言葉は上手く伝わらないが、それは子どもにはわからないためなのか、それとも時代が変わってきているためなのか。

マレーシアではマイノリティの権利が保障されているが、現実には多数派による一方的な態度も見られる。開発のためにヒンドゥ寺院が破壊されることが増えており、2007年には築100年以上のヒンドゥ寺院が多くの反対にもかかわらず破壊されている。また、2001年には、クアラルンプール郊外の住宅地でマレー系結婚式とインド系の葬式があり、小さな争いから死者が出る騒乱に発展する事件があった。『タレントタイム』ではこの事件のマレー系とインド系の立場を入れ替え、互いに相手の立場に立って考えさせている。

多言語セリフの字幕の工夫

多民族社会マレーシアは言語も多様で、多数派民族の言語で国語でもあるマレー語や、都市部を中心に使われている英語のほか、中国系の各方言（広東語など）やインド系諸語（タミル語など）のようなマイノリティの言語も広く使われている。二言語や三言語を話す人も多く、1つの文の中で言語を切り替えることも珍しくない。同じ場にいても、そこで話されていることが理解できている人とそうでない人がいる。

ヤスミン作品では登場人物がどの言葉で話すが重要な意味を持つ場面もあり、マレーシア映画文化研究会では『タレントタイム』はじめていくつかの映画でセリフを言語別に色分けする多色字幕も試みているが、観客への負担を小さくして言語の違いを表現する工夫は尽きない。今回の『タレントタイム』の日本劇場公開版でも、一般の観客向けに見た目のわかりやすさを考えた字幕が工夫されているが、言語の違いがもたらす意味を理解するには観客の想像力も不可欠だろう。

※主人公 Melur の名前の表記は、字幕では「ムルー」となっていますが、本稿では「メル」としています。

*1 劇場公開題は「タレントタイム～優しい歌」だが、以降は「タレントタイム」と表記。

*2 マレーシア映画文化研究会の活動は現在、混成アジア映画研究会に引き継がれている。